

物語文学成立

フルコト・カタリ・モノガタリ

東京大学出版会

凡 例

一 本論文は草稿の段階から一貫して長編的な構想のもとに書かれてきた。従って既発表の論文の集成でなく、学術雑誌や紀要にこれまで発表したいくらかの論考はかえってこの長編論文をもとにしている。よって既発表の論考は、今回のこの論文の発表をまつて、すべてここに戻ることにはしたい。但し、付論はそのかぎりでない。

一、叙述、引用文ともに平易であることを心掛けたが、引用文についてはなお各章の性格によりさまざまな配慮をした。

原則として、『古事記』『万葉集』などは書き下しの文を先に掲げ、ついで原文を併記するようにした。しかし原文を先に出した場合もある。純漢文や準漢文は原文に加えて訓読文を作製することを心掛けたが、原漢文のまま引用する場合もあり、訓読文だけの場合もある。返り点などは施すことを原則としたが、訓みを問題にしたり、訓みを明確にできない場合に返り点を施さないこともある。

書き下し文の作製に当たっては、このあとに述べる『万葉集』の場合を除いて、現代人の表記意識にとって違和感のないものであるように心掛けた。訓み下しの難しいあるいは不確定な場合は一部また全部を原文のままにしておくこともある。原文を併記したので、書き下し文での上代特殊仮名遣いの甲類・乙類の区別はしなかった。

原文も書き下し文も、使用漢字は、常用漢字表にあるものの場合に、新字体を原則としたが、「藝」などいくつかは旧字体を採用した。常用漢字表に拠ったので、「余呂豆餘」(ヨロヅヨ、『万葉集』一七—四〇〇歌)を「余呂豆余」

と表記するような不合理を生じた。また「爾」と「尔」、「禰」と「祢」など、依拠した活字本のせいで両用するなど、字体の多少の混乱がある。

仮名遣いは、古典の場合、歴史仮名遣いに正すことを原則としたが、日本古典文学大系の利用や『源氏物語大成』の利用の場合などに、依拠した本文のままであることもある。

『万葉集』は表意文字として使用されている漢字（漢文的な助辞を含む）と表音的に使用されている漢字（いわゆる万葉仮名など）とに分けて、表意文字を漢字として生かし、表音的な使用の漢字はひらかなに改めるという表記の書き下し文を工夫してみたが、固有名詞などは適宜漢字のままに残したので、必ずしも原則通りでない。戯書などのような場合の処理など成功したとはいえない。送り仮名が現代の慣用と異なる場合には原則としてふりがなを施した。

原文については、以下に掲げる通行の入手しやすい活字本に拠ることを原則とし、字体は前述したように新字体を採用することを大体としたが、句読点、返り点を適宜改訂したので、依拠する本文とちがっている。ページはもとなった活字本のそれである。引用部分については信頼できる諸本に当たり校訂の手を加えることをした。活字本を私に改訂した場合は（ ） 補入や改訂、〔 〕 削除の二種の括弧で示した。なお「」は割注の指示や原文の引用にも使用した。

（引用原文）

『古事記』 日本古典文学大系『古事記 祝詞』のうち『古事記』、倉野憲司校注、一九五八年・第一刷、岩波書店。なお書き下し文は日本古典全書、日本思想大系、新潮日本古典集成などの成果を参照しながら決定した。

『祝詞』 同右、武田祐吉校注。

『日本書紀』 日本古典文学大系、上・一九六七年、下・一九六五年、第一刷。

『万葉集』 日本古典文学大系、高木市之助・五味智英・大野晋校注、第一冊・一九五八年・第四刷、第二冊・一九五九年・第一刷、第三冊・一九六〇年・第一刷、第四冊・一九六三年・第二刷。一〇—三〇二四歌とあるのは『国歌大観』（旧版）の歌番号で卷一〇の三〇二四番歌の意味である。

『風土記』 日本古典文学大系、秋本吉郎校注、一九五八年、第一刷。

『古語拾遺』 岩波文庫〈新版〉、西宮一民校注、一九八五年。但し第三章では天理善本叢書の嘉禄本の写真複製を利用した。

『先代旧事本紀』 鎌田純一著『先代旧事本紀の研究（校本の部）』、吉川弘文館、一九六〇年。

『住吉大社神代記』 田中卓著『住吉大社史（上巻）』、住吉大社奉賛会、一九六三年。

『歌経標式』 日本歌学大系・一、佐佐木信綱編、風間書房、一九六三年。

『新撰姓氏録』 佐伯有清著『新撰姓氏録の研究（本文篇）』、吉川弘文館、一九八一年・第六版。

『古今和歌集』『竹取物語』『伊勢物語』そのほか、多くは日本古典文学大系を使用した。

『源氏物語』 第三章で『源氏物語大成』を使用したほかは、日本古典文学大系・日本古典文学全集に拠った。

以上のようにあるが、各章各節に適宜依拠本文を注記した。南西諸島の古謡類は多く『南島歌謡大成』に拠ったことなど、それぞれ注記してある。

一、引用は「」を適宜利用し、引用の引用は『』となる。引用文献は「」（論文名など）、『』（単行本名、雑誌名）とする。なお必要なぎりでの参考として論文などを引いたが、必読のその見落としが多いことであろうと嘆く。

一、敬称は原則として「氏」としたが、折口信夫など氏を省略した場合もある。

一、索引は人名、文献・作品名、事項・説話・語句、歌・歌謡（『万葉集』歌及び『古事記』『日本書紀』歌謡の番号）から成る。

一、長編論文なので要約（欧文）を付した。これの成るに際してはマーク・A・ハービソン（MARK A. HARBISON）氏の全面的な協力をいただいた。達意の英文が得られたことについてはハービソン氏の功績であり、もし至らないところがあればすべて著者の責任に帰せられる。

目次

凡例

導 入 三

第二編 フルコト

第一章 コトの世界 二

第一節 言事未分化の状態 三

一 訓詁学的な説明——「言」と「語」とのあいだ 三

二 「言」「語」「辞」と「事」との関係 四

三 問題の起点 六

第二節 言語のコト、事象のコト(一) 八

一 『古事記』のコト 八

二 「言」と「事」との使い分け 二〇

第三節	言語のコト、事象のコト(一).....	三
第四節	説話内容を指し示すコト.....	三
第五節	「語は○○に在り」(一).....	三五
一	「語」の引照例.....	三五
二	安康天皇三年八月条の「辞」.....	四三
三	「事」の引照例.....	四四
第六節	「語は○○に在り」(二).....	四七
第七節	和文の「こと」、その他のコト.....	五一
第二章	コトノモト・モト・ムカシ.....	五五
第一節	コトノモトとその消長.....	五五
一	一二種の起源譚.....	五五
二	「縁」字の宛て方.....	五九
三	「言本」と「本」.....	六〇
四	コトワザ・名称・地名・タブーの起源、ほか.....	六三
五	『日本霊異記』ほかの「縁」、まとめ.....	六九

第二節	モト、根原、元、本辞	七
-----	------------	---

第三節	ムカシ、「昔」	八
-----	---------	---

一	ムカシという語、「今は昔」	八
---	---------------	---

二	昔話の起句——奄美・沖縄	八
---	--------------	---

三	口説、古謡、唱え言におけるムカシ——奄美・沖縄	九
---	-------------------------	---

四	ウムイ・オモロにおけるむかし世——奄美・沖縄	九
---	------------------------	---

五	ヤマト古代の非歌謡的伝承の場合	一〇
---	-----------------	----

第三章	フルコトとは何か	一一
-----	----------	----

第一節	フルコトは漢語起源の語か	一二
-----	--------------	----

第二節	「古語」及び「古語」注の問題点	一六
-----	-----------------	----

第三節	『古語拾遺』の「古語」	一七
-----	-------------	----

第四節	『高橋氏文』の「故事」	一四
-----	-------------	----

第五節	祝詞二種のなかの「古語云」	一七
-----	---------------	----

第六節	『歌経標式』の「古事」「古事喩」「古事意」——構造、喩、心と詞	一〇
-----	---------------------------------	----

一	和歌とフルコト	一四
---	---------	----

二	構造	一四二
三	「古事」と「新意」と	一四五
四	フルコトとしての「古事」	一四九
五	「六体」	一五一
六	「直語」の歌	一五四
七	新しい歌体と「ころろ」	一五六
第七節	和文のなかの「ふること」	一五九
第四章	フルコトと『古事記』	一七七
第一節	フルコトの書物	一七七
第二節	「本辞」の研究	一八〇
第三節	「勅語の旧辞」	一八九
第四節	天武天皇の詔	一九六
第五節	『古事記』というテキスト	二〇五
第五章	フルコトの文体——『古事記』を中心に	二〇七
第一節	『古事記』序文の「上古之時」をめぐって	二〇八

第二節 「国稚如浮脂而」……………	三二
第三節 表音表記の意義——助辞のことなど……………	三六
一 音漢字と意漢字との併用……………	三六
二 音漢字に統一意識はあるか……………	三九
三 音漢字の発現する場所、その一……………	三三
四 音漢字の発現する場所、その二……………	三四
第四節 「て」……………	三九
第五節 文末……………	三三
一 古代叙事文の文末……………	三三
二 「き」が半数例……………	三四
三 説話単位における文末「き」文の位置……………	三四
第六節 文中の「し」……………	三五
第七節 歌謡の「き」「し」そのほか——神話的起源……………	三六
第八節 「き」の本性と『古事記』の「けり」……………	三八

第二編 カタリ

第六章 コトの語りとフルコト——『古事記』……………二九六

第一節 コトを語る……………三〇一

一 「語」字について……………三〇一

二 芸能的なカタリ……………三〇二

三 語り・語る・カタラフ……………三〇四

四 コトとカタリとの連関……………三二二

五 「ことのかたりごとをば」……………三二四

第二節 フルコトの語り……………三二七

第七章 語りの力——『日本書紀』……………三三三

第一節 語りの力……………三三三

一 「『カタル』の語義補稿」への疑問……………三三四

二 『日本書紀』の「語」字・「談」字……………三三五

三 「言語」・コトトフ……………三三七

四 「語」字、続き……………三三九

五	カタリ、カタルの事例	三三四
六	コトフ、再び	三四一
第八章	語りとは何か——『万葉集』	三四五
第一節	『万葉集』の「語り」「語る」	三四五
第二節	語りとは何か	三五六
一	文字以前の言語活動	三五六
二	カタリツグ	三五七
三	「けり」のあらわれ	三六一
四	語りの非現場性	三六五
第九章	『万葉集』の伝承関係歌	三七一
第一節	伝承関係歌とは何か	三七二
一	A型歌群	三七二
二	B型歌群	四三二
三	A B型歌群	四七〇
第二節	「けり」の伝来的性格、「き」の神話的性格——伝承関係歌一覧	四七七

第三節 伝承関係歌の構造	四九四
第四節 『万葉集』巻一の巻頭歌——言語テキスト	五〇四
第一〇章 歌謡と語り——伝承者、その一	五五
第一節 「うたふ」と「かたる」	五二五
第二節 「神語」	五三〇
第三節 「天語歌」	五三〇
一 「天語歌」三首	五三〇
二 袁杼比売求婚説話と「天語歌」	五三六
第四節 日女島伝承の歌謡——「歌以ちて語る」	五三〇
第五節 カタリゴトの限定——「ことのかたりごとをば」再び	五三五
一 「あまはせづかひ」	五三五
二 「かたりごと」の限定	五七四
第一章 歴史と語り手——伝承者、その二	五八
第一節 フルコトの伝承者は語部か	五八二

一	フルコトと伝承者	五二
二	語部の研究	五七
三	語部の実態、消長	五九
第二節	語臣と稗田阿礼	五六
一	語臣猪麻呂	五六
二	稗田阿礼	六〇
第三節	歴史と伝承	六三
一	歴史と伝承——伝承・歴史・神話	六三
二	『古事記』は歴史書か	六七
第四節	説話伝承の正統と非正統——民間説話へ	六八
第五節	民間の伝承者	六三
第一二章	モノガタリ	六七
第一節	モノガタリという呼称	六八
一	物語学的排除と還元	六八
二	古伝承とモノガタリ	七〇

三	カタリとモノガタリ	六三三
四	モノガタリ発生説	六三七

第二節	モノは靈魂か物象か	六四七
-----	-----------	-----

一	『古事記』のモノ	六四七
二	モノ・鬼・靈的存在——『万葉集』の戯書	六五〇
三	忌み詞としてのモノ	六五三
四	モノの存在一般指示	六五七

第三節	『日本書紀』の「談」「言談」「所談」「清談」及び「語話」	六六〇
-----	------------------------------	-----

一	『日本書紀』古訓の不確実性	六六〇
二	場面とその用字	六六三
三	モノガタリあるいはカタラフと訓む	六六九
四	「言談」「所談」と眉輪王乱の説話	六七六

第四節	『万葉集』の「物語」「語」	六七八
-----	---------------	-----

第五節	街談巷語と「小説」	六八一
-----	-----------	-----

一	「女乃加太利須留」已恵	六八一
二	「街巷之談」について	六八四

三 「異端」「小説」「怪力乱神」	六六六
四 昔語りの流れ	六六三
第六節 モノガタリの時、場所、モノガタリする行為	六六八
一 カタリとモノガタリ、再び	六八九
二 モノガタリの時、場所	七〇〇
三 幼児のモノガタリ	七〇五
四 モノガタリする行為と説話内容	七〇六
第七節 物語文学の成立	七一一
一 物語文学成立の条件、ここまで	七一一
二 歌語りから物語文学へ	七二四
三 虚構の話、作り話	七二六
四 漢文の叙事文学	七三〇
五 仮名文字との出会い、物語文学の成立	七三四
結語にかえて——物語文学の名義など	七三五
付論	七四一